それ以來と云ふもの夕方になると彼は顔を曇らせ、一寸した物音に對しても氣を配るのであつた。

『全く狩り出された狼のやうだつた』とその勞働者は云つた。

こうした方法によつて兎に角、辯護士は二つの事實を推定することに成功した。その第一はキリーム・イワーノウヰチは絶えず、弟の襲擊に氣をつかつてゐたと云ふこと、第二は發砲を耳にした全部のものが、等しく、直ちに、それがザーハルの仕業であると直覺してしまつたと云ふことであつた。

證人に對する訊問は悉く終つて、休憩となり、さて愈々双方側の辯論戰に這入つた。

十二

『陪審官諸君！』檢事の論告は開始された。

『我々の前には恐るべき、しかも、噫！　それは露西亞人にとつては餘りに常習であるところの、恐るべき事件が提示されたのである。吾が國民は無智である。野蠻である。露西亞文學は彼等を理想化し、彼等に對して神を懷ける國民であり、神を求めつゝある國民であるとの名稱を與へゐる。しかしながら、こゝに、その後者の言は最下等の野蠻人と雖も何等かの意味に於て、神を求むることが、人間の本性であるとの範範内に於て、假りに正當なりとして許せるとしても、前

者の言は、露西亞國民の過去に於ても、現在に於ても、それは何等の證據立て得る實例がないのである。全露西亞史を通じて、それは餘りに無意味な、そして無情な動亂であり、慘酷なる征服であり、慘虐なる皇帝、修道院的狂信者の歴史であつた……。私から見れば、露西亞國民は、寧ろ非宗敎的であり、彼等の捧持してゐるのは、單にそれは迷信に過ぎないのである。彼等が表面信仰してるが如く見へる宗敎に就ても、彼等は、その本質に就て何等理解ある譯でなく、また無關心である。彼等は常に「キリストは苦しみたまへり、我等にもそのことを敎へたまへり」と口にしてゐることは事實である。しかしキリストの人格と、その高遠なる敎義とは、何等彼等に理解されてゐない。彼等が頑迷に盲信してゐるのは寧ろ十月十四日の祭、祟り目、遺骨、燈明等總てそうした、たぐひのもので、一言にして云ふなれば、彼等は宗敎の眞髓よりも、その偶像方面により强い信仰を持つてゐるのである。ある元才的露西亞畫家によつて、敎會で「アーンテェ、イ、ド

ンドンヂャーヂュ」(念佛)を聞きながら、哭き入つてゐる露西亞女が畫かれてゐる。それは、とりもなほさず、彼女が宗敎に就て何にも理解を持たないと云ふことを示したものに他ならないのである。吾々は殆んど許すべからざる輕薄さを持ち、國民的正義を目的としてゐるかの如く見える政治學徒や、政黨が、勝利を占める、それ以前に、それに手後れにならない以前に於て、吾が國民には期待すべき何等特別なものゝないと云ふこと、そして、吾が國民が如何に野蠻的であり、その數百年の間如何に朦昧であり、常に、無政府的な自由、掠奪と暴行の自由を空想してゐた、單純な蠻族的な遊牧民であつたと云ふことを、自覺せしめねばならない。吾々は、或は近い將來に於て、掠奪が公々然となり、あらゆる蠻風が巷に競ひ、流血は天にも迸り、歐州、並に全世界の文明に戰慄と、驚駭とを招徠する時代の來るのを、豫想することが出來るのである。

そうだ！　吾々露西亞人は野蠻である……掠奪、暴行、我儘勝手、殺人者であ

り、大馬鹿者である。これこそ吾が國民の傳統的生活を卒直に表現した言葉である。緑の蛇と、赤い雄鷄(譯者註、亂酔と火事)は我々の家蓄である。(我々ロシヤ人の生活になくてはならない)吾々野蠻人はその面相に於て、その精神に於て、未だなほ、亞細亞人的痕跡から脱却してゐない。即ち、その頰骨の大にして突起してゐる點に於て、その細目にして、慾情の猛烈にして、制禦を知らない點に於て、然りである。

戀する以上は、盲目的に
嚇す以上は、冗談半分でやるな。
罵る以上は、邁までも
毒を食はば、皿までだ。

とは、吾が露西亞詩人のみの、かゝる情景を寫して叫び得る言葉である。

まことに、吾々露西亞國民は節度と云ふものにかけては、全くの無智である。

吾が國民の宗教心と云ふものは、繰り返して云ふ、固陋な迷信によつて鑄固められたものであり、その觀念は幻想と獨斷である。政爭は常に流血の恐怖と、慘酷なる獨裁の表示である。その理想は無政府的の自由である。

吾が國民の文學——それは尠くとも傲慢なる豫言的のものであり、且つ、それは、我と我が身を鞭打するものである。吾が國民の民謠——それは野蠻極まるものでなければ、低級な、ジプシイ的淫蕩なものである。吾が國民の英雄——それは、ステニカ、ラヂヌイ、とプガチエフ、左もなくば、一片の堅パンで命をつないだと云ふ、あの乾からびた考人、セラヒモフである。吾が國民の娯樂——それは酒に狂酔することである。吾が國民の戀——それは、自己犧牲と拷問である。一度熱情の發作するや、吾が國民はあらゆるものを破壞し、總てを汚穢の中に蹂躙するのである。名譽も、家族も、自分自身までも、泥土の中に踏みつけてしまふのである。吾が國の娘共は決して純潔であると云ふことが出來ない。婦人は貞

節ではない。彼女等は墮落し、放埒である。それは彼女等が、何ものをも惜まず、何ものをも、尊重せない爲めである。不幸な戀に泣く女共は、修道院に集り、呪はれたる戀に惱む男達は、自から額に彈丸を射込むか、乃至は、ナイフを握ると云ふ有樣である。これを一言にして云ふなれば、吾が國民の總ては、無分別であり、放埒であり、道樂者であり、遊蕩兒であり、ノラクラ者であり、酒飲みである。最上の敎養のある階級と雖も、この亂醉の點に至つては、最下級のものから一歩も出てゐない。あの高麗な「ヤーラ」の館から、最下級な「居酒屋」までを數へると、全露西亞は、酒場を以て滿ちてゐるのである。若しも吾が新兵の一隊が名譽ある行進の途中、奮然立つて、酒場を木破微塵に打ち壞し、亦學生達が敎育紀念日に「Gaudeamus」を高唱して、遊廊を叩き毀し得る場合があるとするならば——假令一時的にもせよその精神だけは望ましいのである——かくの如きは我が國民が無賴漢であり、墮落民であり、破壞以外、何一つ爲し得ない無能力者

だとの證據であると云ふことが出來ないかも知れない。反對に、吾が國民は、才幹があり、聰明であり、大偉業の創設に對する適當なる、能力の所有者であるかも知れない。だが、何はともあれ、吾が國民は、先づ第一に野蠻人である！……野蠻人の特性として吾が國民は、何ごとにかけても中庸を保つことに缺けてゐる。自己の熱情を統禦出來ないのである。吾が國民の精神は祖國の曠野の如く廣大ではあるが、その密林の如く無秩序である。吾が國民の偉大なる價値は正に消滅せんとしつゝあるのである。しかも彼等は、その名を役立たせることを知らず、寧ろ自ら破滅にと急いでゐるのである。この不幸に逆つて立つたところの、愛國者達が、正義に立脚し、吾が露西亞は、救世の士と、堅實なる統治者を切に要求しつゝあると云ふことを、千度も繰り返し叫び來り、今猶、繰り返しつゝある所以である　吾が國は我々を、我々自身の惡から救ふところの、この統治者を失ふたとき、恐嘆を招き、極なき無秩序の社會と化することであらう！　恰も火遊びを

する小兒の樣に吾々は、我が不幸なる生國を燒滅さし、總てを掃蕩し、總てを滅却するであらう！　一際の國民的將來は棄て去られ、希望は消失し、理想の光輝は滅絕し、そして國家自體が滅亡に向つたとき、そこには、たゞ乞食や、飢たるもの、煽動家の跳梁するところとなるであらう！

諸君は或は反問するかも知れない、「君の述べ來つたそれ等のことは、我々が今この法廷で審議せやうとしてゐる事件と、一體、どんな交渉があるんだ？」と。

然り！……だが諸君よ！　現在被告席なる、この我々の面前には、偉大なる野蠻の露西亞が生んだ數多の寵兒中の一人であり、現實の露西亞的勇敢なる若者、商人の息子、ヂーキイ・ザーハルが居る。吾が祖國は如斯き善良なる若者によつて滿されてゐるのである。彼等はその被れる帽子のみならず、その腦髓迄が斜に傾いてゐるのである。彼等は肩を怒らし、片手を揮り上げる、情熱と、大膽の所有者である。彼等の名は今流行である……彼等は文學に耽溺し、政治團等を組織し、

而して全世界に向つて、自己の滅法界でない大膽さを示し、その限りない發展を實行するの日を期待しつゝある。彼等は結構實行も爲し兼ねないものでもあるまい……そのとき世界は顫え出すかも知れない――ヂーキイ・ザーハル樣のお通行だ……。その姓の立に憧着するかも知れない。そして先進國の歐洲は恐愕して尻「ヂーキイ」!!　呼乎！　それは何たる純粹の露西亞人そのものの生活を物語るに足る、象徵的な姓であることよ！　そして、同時にそれは亦、何たる野蠻的な姓であることよ！　如斯き典型的家庭と云ふものは、ただ吾が國民のみが創造し得るところのものである。

私は諸君の許を得て、今こゝに、少しく彼の家庭の來歷を述べたいと思ふ。彼の祖父は本通りの目拔きの場所に旅館を經營し、旅行者の懷中を絞り、その爲めには、人殺しをせないと云ふことは、僅かに口實によつて、まぬかれてゐた程であつた。その息子、即ち彼等の父親は、財產の全部を固く手中に握り込み、教會

には多少奉納をしたかも知れないが、その代り、生きた人間からも、死んだ人間からさえも、剝奪をすることを辭せなかつたのである。彼の息子等は、矢張り父親の筆法を受け繼いで掠奪、詐欺の手段を撰んだのである。彼等の財産なるものが、實にかうした手段によつて獲た、血と汚物の蓄積であり、罪の血潮は三代傳はる、その全家族のものに泌み透つてゐるのである。最近に於て、この家庭には既に頭立つたものがなかつたと云ことを、我々は認めてをく必要がある。家族と云ふのは、母親と、その息子なる三人の兄弟、並に、長男の妻、とであつた。母親は、僞善と、貪慾で聞こえてゐた。彼女は燈明を上げること、金を取り込む心配と、息子達に小言を云ふこと、嫁を虐待するのが、一日の仕事であつた。長男と云ふのは頑愚で、吝嗇家であり、冷酷漢であつた。彼は、盲目的な情慾と陰慘な性格の所有者であつた。次男――被告――は、快活な道樂者で、金錢に對しては餘り執着を持たない男であつた。三男は生れつきの白痴で、その兩親が、彼を

神より罰を受けた者と解釋してゐたことも、蓋し無意味ではなかつた。彼等の生活が、迷信的であり、掠奪的であり、飲んだくれであり、暗い本能の充足に對する兇惡的であつたことは、蓋し、彼等が、眞に、「チーキイ」の姓に恥じなかつたところのものである。

この野蠻人の生活は同時に、露西亞に於ける、何百萬人の家庭生活である。彼等には、目的もなく、理想もなく、主義もなく、自覺もないのである。しかし、私はこうした家庭が「盲目漢」の代表であり、所謂「握り屋」として、特別な階級に屬してゐるものであると斷言するを欲しないのである。

どうして？　卽ち、我々は、こうしたチーキイ(野蠻)をば、アングリスキイ・ナベレイジ街に於ける、待從官の服裝をした、一流の何々公爵の姓を名乘る大邸宅の中にも、木綿の長外套を着歩いてゐる、片田舍に於ても、青服を着た新文明の開拓者――無產階級勞働者の地下室の中にも、見ることが出來るのである。私

は、私の言が無根據なものでないと云ふことを立證する爲めには、幾多の例をさえ上げることが出來るが、今はそれを省略して置く。それを一言にして云ふなれば、彼等總ては先づ第一に、彼等が露西亞人であると云へば盡きる。

しかし問題は餘りに横道に這入り過ぎた。前に戻つて、二度、ヂーキイ家の問題を續けやう！

こゝに、長男が、妻を迎へたことによつて家庭内には、新たな顔が加はつた譯である。彼女は不躾で、情熱的な、所謂、露西亞的美しさを持つた美人であた。その野生的なあたりは、露西亞民謠中のヒロイン、そのものであつた。彼女の鼻先から足の爪先までの容姿は、雌孔雀のそれの樣であり、頸筋は白島の樣であつた。だが心は……荒れ牝馬の、それの如くであつた。彼女の結婚には愛などと云ふものはなかつた。青春の時代に這入つた彼女の、單なる感覺的享樂の成熟からであつた。結婚は彼女にとつて、所謂「間に合せ」に過ぎなかつたのである。噫

！露西亞婦人の結婚、乃至は戀愛なるものは、今日迄、百中の九十迄は全くそれに過ぎない。蠻民でないと誰が云ひ得やう？　不幸なる彼女は自己の卑しい誘惑によつて、その若さと、美くしい、健康な肉體の權威を自覺し、高慢に周圍を眺めつゝ、卑しい夫を見る目も盲目的に結婚生活に這入つたのである。妻たるものゝ、務も、義務も考へずに。恰も、ある掠奪蠻民（譯者註、鞭韃人の歐露浸入を指す）の捕虜となつた。彼女等の曾祖母達が、捕はれの翌日、涙を拭ひ去つて、掠奪者の爲めに馬車の中に食糧品を運び込み、新らしく妻となることに、無頓着に從つた、無自覺の當時の女共の、それの如くであつた。かくして彼女は、愛のない夫に――しかし、それは法律の命ずるところで、如何とも出來ない――身をゆだねたのである。だが、彼女の中の獸性は、若くて、快活な夫の弟を見たとき目覺めて來たのである。ヂーキイ・ザーハルは、獨身者であつた。彼は、放埒な不品行を尊重してゐた。

彼には、彼の好んで唱ふ、そして、それは、彼の性格にはふさはしい小唄があつた。

「おしやべりの媒酌人よ！
　俺には用はない。
どうして〳〵、女房持の君達に
　俺の氣持ちが解るかい。
この氣樂な自由を
　俺に棄てろと云ふのかい。
女の數は多いんだ
　たつた一人に見切をつけろ？
駄目だ、駄目だ、そんな業は
　俺には到底、出來ん相談だ！

心を蕩かす樣な、美くしい義姉を一目見るなり、彼の兇暴な血は湧き立つたのである。僞の宗教を迷信的に教へ込まれてゐた彼は、神に對して畏れ、罪を恐れもしてゐた。しかし、この粗朴な恐怖も、實は、最初の間だけであつた。その切なる慾求の前には、神もなければ、罪もなかつた。こゝに、一度目覺めた衝動、卽ち止まることを知らない野獸的慾求が、噴火の樣に、逆上したのである。三ケ月の間と云ふもの、彼等の有頂天の享樂はつゞいた。一際は忘れ去られ、あらゆるものは、その情熱の焰の中に燒き盡くされた。邸內全部の働き人達が彼等の關係を知つた。しかし、彼等は、何ものをも顧ず、何ものにも考慮することなく、たゞ次から次へと、抱擁のことのみ思ひ煩ふた。ザーハルとしては、若し彼等の關係が世間に知れれば、一際は——家庭も、生涯の幸福も、生活も、萬事終末であると云ふことを、はつきり知つてゐた筈であつた。しかしその爲めに、彼は躊躇するものではなかつた。彼は戀した。そして情慾の奴隷となつてしまつた。そ

れは、やがて大びらになつた。戀に蕩酔した戀の女は、最後の自重までも失つてしまひ、露西亞女的の無茶苦茶に陷り、自暴自棄になつてしまつた。彼女は大膽にも、夜な夜な夫の床を脱け出し、戀人の寢室に通つたのである。こゝに異變事が突發したことは、蓋し當然なことと云はなくてはならない。野卑な、全く野獸の如き格闘が兄弟の間に演じられたのである。双方の爭の種である搔き裂かれた女を前に、相爭ふた二人の野蠻人の形相は、獲物を奪ひ合ふ二匹の野獸そのまゝであつたことだらう！　格闘は偶然にも、決定的に相手を倒す迄には至らなかつた。

ザーハルは速座に、邸から放逐された。農場に引き上げた彼は、其處に於て、皎む樣な憎惡と、嫉妬と、滿たされない情慾とを忍びながら、一人日を送つてゐた。

彼にとつては、眞の肉身の兄に對して、彼は突然、兇惡な敵愾心を懷くに至つ

たのである。兄は彼にとつては享樂の障碍になつて來たからである。

彼がその孤獨生活の間、人知れず、良心を持つて、彼が家庭に及ぼしたところの不名譽について、顧みたか、どうか？　自己の行爲の醜惡、野鄙に對して、慙愧したかどうか？　否！　彼には情慾！　只その情慾の支配があつたのみである。グラヒラの嬌妖なる影が執拗くつきまとうのみであつた。

夜となく晝となく彼の思ひ煩ふことは、たゞ彼女の妖艶の姿のみであつた。彼は酒に賴らふとした。（露西亞式回避方法）次に百姓女との野鄙な抱擁によつて、一時を忘れやうとした。が、總て無效に終つた。

斯くして彼は、一時も落ち着く餘裕もなく、野獸の樣に、農場に、働き廻つたが、矢張り、總ては、不成功に終つた。……

卽ち、彼は只の一度も自己の行爲に對して反省し、そして新たな正しい、清かな生活に這入らうとの、心からの眞面目さに立ち歸つたことのない證據であると

斷言するものである。

とは云へ、それから程なく彼も、十字架のこと、修道院のことを考へたのである。偶々町から老人の馭者が訪れて來て、グラヒラが拷問されたこと。キリーム・イワーノウヰッチが改めて、彼女に、同棲することを强要したこと、彼女もそれに妥協した等のことを、彼に物語つた。若しも、文明人であるなれば、こうした、ふしだらな、奴隷根性の女に對しては侮蔑を持つて、奮然、斷念する筈である。だが、其處が、露西亞人となると、見解は全く違ふ。卽ち彼にとつては女の魂なんか何んの價値があらう？　彼に必要なのは、たゞ肉體のみである。それは彼にとつてどれ程蠱惑的なものであつたらう？　由來倫理の道なぞ、野蠻人に理解されやう筈はないんだ。吾が國民は總て淫賣婦と結婚してゐるのであり、あたら貴重な生命を、唄唱ひのヂプシイ風情の女の足下に投げ出し、或は小供を伴つた娘と結婚し、乃至は私生兒が家庭内に出現することに對して、妥協して行く

ことは、何でもない日常生活である。彼等の社會に於ては、そうしたことは極めて簡單に取りかたづけられる。卽ち、「大くして、勞働者にするんだ」と、是れである。

ところで、彼のグラヒラに對する感情はどうであつたか？　彼女が、假令、一時的にもせよ、夫に歸服したことに對して、彼は、どれ位の憎惡を彼女に向けたことであらう！　と諸君は云ふのですか？　しかし、諸君は誤つてゐる。復讐は頭のてつぺんから足の先まで罪に染んでゐる、彼女に對してではなくして、何等罪のない、彼の女の夫に向けてゞあつた。何となれば、兄は、彼にとつて、邪魔者であるからである。それは、野蠻人を、そゝのかすに、充分な結論であつた……。

叮嚀に馭者を送り出した後、彼、ヂーキイ・ザーハルは、直に銃を手にして、帽子も被らず、復讐の血に熱して我を忘れ、殺人を一念に、夜を徹して原野を、

沼を駈け通したのである。殺人の一念以外、前途のことなぞ彼の頭に思ひ泛ばれる譯がなかつた。何がさて、野蠻人のことだ！　自己の觀念の論理的進展などの能力のあらう筈もなかつた。

彼が邸に到着した時は、邸内は既に寢靜つてゐた頃であつた……。彼は窓にうつる明りで兄は今、寢衣姿で寢床に入る頃なることを想像した。しかも、その同じ床の中には、グラヒラが居るではないか！　彼の全身の血は逆上した……。

兇行の時刻まで彼が、どれ程の時間をその窓下に佇みつゞけたか、誰が知らう？

證人の證言によれば、キリームは遲くまで起きて居り、二度程廊下に現はれ、最初は、明日の仕事の手順のことを云ひ付け、二度目には水を飲みたいと言つたとのことである。

眞の闇夜であつた。三十分、乃至は一時間の間、窓外に佇みつゞけてゐた加害

者は、その間恐らく、何等の反省も、懺悔も、片影だになかつたのである。しかも彼の前に居るのは自分の實兄であるとさへ意識を持たなかつたのである。反對に、情慾が彼の頭を混迷さしてしまつたのである。野獸の執拗を以て、彼は自分の犧牲者を待ち伏せたのである。終に好機會が來た。轟然たる一發に兄は射倒されたのである。被害者は僅かに相手の名を呼ぶことが出來たのみである。勿論、彼は發砲の閃光によつて相手をそれと、見てとつたのであつた。……加害者がはつきりとした意識を取り戻したのは兇行の直後の瞬間であつた。情熱に自制力を失つた人間と云ふものは常に、その、情慾の充足、乃至はその目的の達成以外全然、他に考慮を置くものではない。彼はたゞ一意盲目的に前進するのみである。が、しかし、目的が達成せらるゝや否や、彼の意識は、忽ちに目覺め、そのとき初めて、仕出かしたことに對して、恐怖の眼を向けるものである。

銃聲に目を醒した人々の聲や、犬の吠え聲を耳にした彼は、素迅く一方に、逃

走したのである。恐怖の爲めからではなく、亦、脱れんとする理由からでもなく、無意識的に兇行の場所から遠かつた彼は、全く、驚愕に陷り、それが電光の如く彼の腦裡を閃透した。

彼が兇器——銃を現場に置き忘れたのみばかりではなく、なほ、次の點について更に考慮を置かなかつた點より推測するに、彼は自己の犯跡を、くらまさうとさえしなかつたのである。

即ち、彼は、自分のとり亂れた服裝を繕ふことをせなかつたこと。夜家出したことを、誰にも目に立たないやうに、こつそりと、農舍に戻らうと努めなかつたことである。勿論、農舍に於ては、何一つ知つて居らう筈もなく、朝になつて、昨夜は氣持ちよく眠り通したかの如くよそをつて、そして、變事に就ては何等の疑念も懷かせることなく、何喰はぬ顏して、彼は自分の部屋に戻ることが出來た筈であつた。しかるに、彼は全く反對に、自己を、かばふと云ふことに就ては、

何一つ考へてゐなかつたのである。彼は、野獸のやうに、殊更に部屋の片隅に身を寄せて、終日なにも食はず、何にを話しかけられても口一つ開かなかつたのである。

兇霧は既に彼から全く欝散し、新たに作られた驚愕が彼の全身に襲ひ來り、良心が内部から彼を、搔きむしつたのである。牢獄、苦役、慚愧の思は、彼にとつていかばかりだつたらう？　情熱の人間は極端から極端に陷るものである。最初罪、次に懺悔へと。

露西亞の總ての兇犯者は斷食と、鐵鎖を以て終つてゐる。

露西亞精神の先覺者であり、天禀ある詩人が、露西亞の窃盗、及び殺人犯人に就て書いた詩、即ち、

良心は各人の心の中にひそむ
彼女は暗黑の日に於て目醒む

の一節は味ふべき言葉であると思ふ。

然り――、そは、生の最後に向つて、縺れ〳〵て行く、未解決の結目である。當初の無分別、無反省の情熱的亂行も、やがては、罪に對する自覺となり、やがては自己苛責、懺悔となるのである。そは、露西亞式精神の辿るべき唯一の經路である。ヂーキイ・ザーハルも亦、その範圍に漏れない顯著な好適例である。性の色香の追從に沒頭し、死の恐怖も、罪惡も、彼にとつては意に介するところではなかつた。……。彼は自ら求めて罪業を撰んだのである。しかし、彼が、一度それる遂行するや、忽ちにして、彼の生氣は衰滅に向つて急ぎつゝあるのである。

嗚呼！〻今、彼は心靜かに罪の報、十字架を負はんとしてゐるのである。彼が事件の進行に對して、如何に冷淡であつたかは、諸君等のよく注意せるところであつた。彼が自分の罪を否定したのは事實であつた。だが、しかし、彼の辯解はたゞたゞ機械的で「私は兄を殺しません」と、只、それのみであつた。彼にとつて

は既に同じことであつた。――牢獄に繫れやうと、苦役に迫ひやられやうと。――彼には、その心の中に目覺た良心の裁きが、より以上恐ろしかつたのである。即ち、彼は、自身の內部で、正に執行しつゝある、乃至は執行せんとしてゐる秘密の刑罰に對して、自らを傾倒してゐるのである。彼の節度を知らなかつた精神は、今、新たなる問題――自己苛責の興味に向はんとしつゝあるのである。彼のあらゆる歡樂生活は今、亡びんとしてゐるのである。彼は、自らを、兄殺しの重罪に陷れ、自身をまでも破滅せしめた、その、ことの起りに就ては目を覆はんとしてゐるのである。嗚呼！　諸君よ！　若し彼に罪(兄殺しの)がなかつたなら勿論、彼に係る全體の樣子は、少くも、今よりも異つてゐた筈だ。卽ち不正なる告訴は彼を驚愕、乃至は、動亂せしめた筈だ。彼は全力を上げて、自分の無罪を立證するに勉め、そして、勿論、既に彼の放免を待ちこがれてゐる、彼にとつては懷かしい戀人の居る、自由の世界へ歸ることに、全力を上げて努力した筈だ。若

し彼に血の責任がないとするならば、彼等の間に、被害者の血の恐怖はなかつた筈だ。兄の死は、一面彼にとつては不幸であり、重大なことであるとするも、それは、彼等の戀の歡樂への解放であり、兄の不幸が彼等の幸福の助けとなつた筈だ！　が、彼に於ける狀景は變つて來てゐるのである。自由は彼に歡樂を約束せず、自分の手で倒れた、兄の亡靈が彼につきまとひ、それが爲め、彼としても、どうしてその血に染んだ手で戀人を抱擁する氣になれ得やう？　それだけは流石彼としても爲し得ないところである。彼等の關係は、既に萬事終りを告げてゐる。更に猶ほ、彼には罪なしと、主張するものがあるとするも、彼に對する母親と戀人の態度の疑念が殘されてゐる。先づ當の母親であるが、彼女は、牝虎そのまゝで、金鐵をも引き裂く勢で、看手の手から息子を奪取せやうと努め、獄舍の門から一歩も動かぬ權幕であつた。情婦のことに就ては、今改めて、語るべきことはない。彼女は、事件の起つて以來、これとして、目立つた變化もなかつたのである。

る。彼女等は、何と云つても、單純な信仰を持つた、平凡な女に過ぎないのである……。彼女等は、時代からも、世間からも既に、棄てられてはゐるが、しかし、彼が、重い罪を犯したと云ふことに對して、それは自分達流な、解釋からではあるが、彼は重い徵罰を受けねばならないと云ふことを、知つてゐる。母親は、毎日、朝から晩まで息子の爲めに祈り、一方情婦は獄舍の彼の許に所謂「差し入れ物」を運んでゐるが、彼女等にとつては、彼は既に、息子でもなければ、戀人でもなく、たゞ一人の「不幸な人間」であり、神の手によつて捕はれたる、罪人であつた。むべなるかな！　今、彼女等は運命に對して、心靜かに、沈默してゐるのである。』

檢事はなほ、直接證據調査に關して數語を言及し、そして、辯護士の側から持ち出さるべき、辯論のある部分に豫め反駁を加へ、次の如く、その論告を終結した。

『今茲に、諸君の前には犯罪に關する全情景が、論理的に進展せられてゐるのである。犯跡は、明瞭である。本事件參考人の顏に明かに、それと物語られてゐるのである。假令抑壓せやうとも、否定し得ることの出來ない、これ等幾多の證據――銃、夜中の家出、取り亂された服裝、彼の通過した道程に對する實證、被害者の死に先だつて叫んだ、加害者の名――が無理にも否定されたとしても、私は結極、次の如く、斷言せざるを得ない！　殺人者は、此處に在る。彼は被告席なる諸君の面前に居る！……と。諸君よ！　私は露西亞を滅亡に向けて導きつゝあり、露西亞を破滅せんとしつゝある、無分別、不行跡、放埒な精神等、總ての野蠻性の所有者たる彼に對して、諸君の公正なる裁決を希望する次第である。』

十三

檢事の論告が終つて休憩となり、裁判所の廣間と廊下は忽ちにして搖きの海と變つた。聽衆はいくつかの區切りに集團を作り、各中心には猛烈なる論爭が叫ばれてゐた。それは恰も、檢事の論告が最初この平凡な事件に何等興味を懷いてゐなかつた聽衆全體の目を、突然開かしめたかの如くに見えた

犯人は明かにザーハルであること、そのことに就ては既に何人も疑を懷かず、またそこには、疑念をさしはさむ餘地がなかつた。檢事によつて序述された事件の情景は明瞭で、恰も彼は開かれてある本を讀む如くに、事件關係人の精神を說

述したのである。彼の辯論の大部分は思想問題の追求であり、當該事件の分野からは遙か距つたものであり、尠くもザーハル個人の運命問題をば第二義的に取り扱つたかの如くであつた。當時露西亞の社會は、屈辱的媾和と社會革命の成熟と云ふ、重大なる時機に臨んでゐた。其の爲め露西亞大衆の心理狀態は傷けられ、攪亂されてゐた。從つて奇拔なる辭句が歡迎され繰り返された。例へば、「露西亞には宗教なく、あるのは迷信のみ」「殺戮と暴虐の爭鬪——それは露國内に於ける傳統的現象である」「赤い雄鷄と、青い蛇——それが我が國の家蓄である」「露西亞に於ける殺人犯人の最後は斷食と鐵鎖である」「我が國民の自由——それは無政府であり、政治爭鬪——それは恐怖手段か乃至は兇惡なる獨裁政治である」中でもいぢゞるしい例は「近き將來に於て或は全社會に亘つて公々然たる掠奪が許されるに及んで、この野蠻なる社會は修羅の巷と化すだらう！」等是れである。

『實際一大事だ！　嗚乎！　歐羅巴よ！　歐羅巴よ！』

『そうだ我が國民の自由——それは無政府であり、我が國民の理想——それは幻想であり、我が國民の政爭——それは爆彈と恐怖手段と獨裁政治だ』と云ふ樣な言が聽衆中に繰返され、『今に見るがいゝんだ、彼等は諸君にあゝした「野蠻」を見せつける事だらう。それは何たる呪ふべき自由であらう！　國民の九割までがザーハルや、グラヒラ的のものであるとき、國民的自覺などと云ふことはどうして國家に期待出來やう。そこで、期するところ無政府なんだ、そうなるより他仕方がないんだ』と聲高く叫ばれた。

勿論、聽衆と云つても、その大部分は青年であり、彼等の主腦者を以て任じてゐる、高等學校の教授連中の社會民主々義者、ボリシエイキの文學者等は熱叫し檢事を「國粹狂者」として罵倒し、彼の國家論の解釋、並に低級なザーハル一個人の問題と、我が偉大なる露西亞民衆、特に我が注目に値するプロレタリアットを混同した點に就て猛烈に檢事を非難した。

『ブルヂョア社會の範圍に於ては、勿論、彼、檢事の言は正當なりとして許せるとしても、併し彼はプロレタリアットの社會を無視してゐる！』

『ユスウポフのことに就ては諷示し、ブラソロフとネドーノソフをは明らさまに名差し、迷信的な說明さへ加へたが、議論がプロレタリアットの問題に觸れると、どうやら有耶無耶だつたよ……矢張りプロレタリアットには豫防線を張つた譯かね！　ハッハー。』

しかし、大體に於て印象は大きなものであつた。既に一般のものにとつては、辯護士が如何にザーハルの立場を辯護するかと云ふことに就ては興味を失つてゐた。有罪の宣告はまぬかれない如くであつた。

辯護士ドウホエッキイは明かに全體の雰圍氣を見てとつたに違いなかつた、なぜと云ふに彼の擧動にイラ〳〵としたところがあり、屢々例の通り鼻を動めかしてゐたから。それは兎も角くとして、彼は自信と多少の皮肉とを加味して次の如

く辯論を始めた——

『陪審官の諸君！　我々は今日、この席上に於て、事件の範圍を無限に擴大し且つ我が廣大なる祖國の殆んど隅々にまでも說き及ぼされたる天才的なる雄辯を拜聽致しました。運命と事件とを結びつけた點に於て彼の議論は多數のものを感動させざるを得なかつたのであります。露西亞人の心理を餘りに特性化したところの或る點に關しては必ずしも同意することは出來ないが、しかし、私の尊敬する論者の、その心理解剖の大膽にして、明晰、且つ深刻味に對しては、敢て否定するものではないのであります。私は決して、强いて彼と論爭を欲するものではありません……と云ふのは他ではありません。私個人としては尊ろ彼を尊敬してゐるものであり、且つ我々は今、集會の席に在るものではなく、法廷に在るものであり、私としても講演者ではなく、辯護士としてこの席に臨んでゐる、その理由からであります。私に命じられた責任は何よりも先づ、諸君の判決を仰がんと

してゐる訴訟依頼人たるの職責を全ふする、その事を念頭に置かなければならないのであります。寔に被告をしてあらゆる國家的缺陷の責任者とし、彼を、恰もその象徴の代表者の如く看做し、これを問責するが如きは、斷じて許すべからざることであります。我々は審判官であり、それ以外であることは許されないのであります。この意味に於て、私は、原告が自己の雄辯にまかせて、現實に傷いたところの人間に對する我等の注意を他に拉致したことに對して、嚴しく非難するに躊躇せないのであります。我々は世界の問題に關して質問を受けて居る譯ではなく、亦、歴史的懸案の解決の爲めに本席に招かれたものでもありません。私共は、こゝに提示された簡單明瞭な個人の問題、即ちヂーキイ・ザーハルが兄を殺害したか、否かを裁決すればいゝのであります。しかるに何ぞはからん、我々は露西亞國民性問題とか歐羅巴と亞細亞問題、無政府と鐵鎖問題等、疑もなく、就中興味ある題材に就て説明されたのであります。寔に結構ではあるが、それ等は

孰れも一つの事實に對して缺陷を持つてゐるのであります。即ち、それ等各々は孰れも本訴訟に對しては、甚だ緣遠い關係に置かるべきものであることであります』

聽衆席に起つた微かな笑聲を耳にし、聽衆に感動を與えたことに滿足を表した辯護士は、明かに雰圍氣を摘發しながら更に辯論を進めた。

『かるが故に、私はこうした問題は、一般の適當な判斷に俟つ程度に留め、直ちに本問題に論旨を移さうと思ふのであります。殺人犯人は果して、ヂーキイ・ザーハルであるや否や？　私は殺人犯人は彼ではないと考へるものであり、且つ信ずるものであります。その然る所以をこゝに立證しやうと思ひます。一體彼を眞の犯人なりと斷定する如何なる證據が我々に示されたでせう？　證據物件として上げられた數々はありますが、それは期するところ二つの範圍に色別することが出來ます。即ち具體的證據と心理的考察とであります。玆に證據として數へら

れてゐるものとしては即ち、銃、夜中の家出、汚れた着物、殺意を含んだ威嚇、——「犬蓄生を射殺してやるんだ」——、最後に被害者が死に先だつて叫んだ加害者の名、是等である。孰れも證據としては重要なるものである。が、しかし、それ等の孰れもは、犯人は明かに被告に違ひない、他にある譯がない、と云ふ、先入觀念を基礎としたものを受け入れたものである。本法廷に於ても、且つ豫審に於てさえ、たゞの一度も、キリーム・イワーノウヰッチの殺害者として、他に何人か嫌疑者ありや、否や、と云ふ問題が起らなかつたことは、如何にも不思議千萬である。そして直ちに、被告をもつて決定的の犯人と斷定してしまつたのである。其れ故に總ての審問も、總ての心理方面の考察も、一切、ザーハルが犯人であると云ふことを基礎に出發してゐるのであります。それたからこそ、銃だとか、夜中の家出だとか、被害者の叫等、そうした、總ては恰も正確に切られた西瓜の各片を元通りに一つ一つ組み合せが出來る樣に、巧みに組合せ得るのであります。

しかし、解り切つた兒戯的なことは扨て置いて、兎も角も、暫時の間でも、犯人はザーハルではないとしてみたらどうでせう？　そうすると、あの全體の細目も自然と他の説明を以て置き換へねばならないと云ふ結果になりはしないでせうか？　實際犯人は彼ではなくして、誰か他の者であると云ひ得ない理由がどこにあるでせう？　被害者の氣むづかしかつた性質を、彼の生涯が掠奪と、詐滿と、詐欺によつて滿ちてゐたことを、彼が多くの人を侮辱し、苦しめ、虐げ、使用人に對しては亂暴で、慘酷で、無情に振舞つたことを、想ひ起して戴きたい。被害者に對しては特別な愚鈍の弟でさへもが反感を懷いてゐたと云ふのに、いはんや、他の多くの人達の反感は、更により強いものであつたとする私の推定はほゞ誤りないことを私は信ずるものであります。……血に染つた裁判所こそ、寔に我が國の慣習的現象であるのであります……。我が國の社會は未だ改革者と壓迫者との爭鬪が合理的域にまで發達してはをらず、そこには我が國の慣用的な銃と劍——

流血の統治があるのみであります。私は、吾が政治團體は、常に邁く迄も正義を大衆の裁判に向つて訴へつゝあるものであると云ふことを説明したいのでありますが、それはとりもなほさず檢事の轍を踏んで、横道に這入る結果になるのであります。故に私は、この問題は殺人犯人の問題の解決後に讓らうと思ふのであります。我々はその問題を解決せんが爲にのみこゝに出席したのであります。先づ被告に對して攻撃を加へつゝある證據品の討究から始めやうぢやありませんか。就中主要なるものとして數へられてゐるのは……鐵砲である。しかし、一體該品は兇行のあつた以前に如何なる場所に置て在つたものなるや？　全く不得要領であります。鐵砲は下女の手によつて、戸棚の中に隱されたものであると云ふ、勞働者の證言を、檢事は斷乎として、全然信用してゐない。從つて馭者が、それを持ち出して來やうと思つたが殘念なことに忘れたと云ふ、その言をも信じやうとはしないのであります……。果して鐵砲は戸棚の中に置かれてあつたものとすれ

ば、其後その戸棚の在る廊下に何回となく出這入りした、下女なり、女コックなり、母親なり、三人の勞働者なり、乃至は當の被害者本人の手によつて氣付かれない場所に仕舞込まれて在るものを、ザーハルが搜し出し得やうとは、何としても想像出來ないことである。のみならず格闘の際被告から鐵砲をもぎ取つた後、彼を無理やりに部屋に押し込め嚴重に錠を下してゐたと云ふに……。それでも猶、彼がどこぞへ鐵砲をこつそり仕舞ひ込んで置くことが出來たでせうか？　勿論出來得ることぢやない。彼としてはそんなどころではなかつた筈です。彼としては鐵砲を搜すことなどは思つても見なかつたことであらうし、よし搜すにして見たところ、それは内々、嚴重に監視をつけてある、家の中をくまなく搜し廻らなければならないと云ふことになるのです！　不合理極まる話だ！　しかるに銃の在かは今以つて有耶無耶に放擲されてゐるのでありますが……それは、それとして、次の問題に移らうと思ひます！　ヂーキイ・ザーハルは、戀人が拷問され、變心

したとの、老馭者の話しに、亢奮し、夜通し原野を彷ひ歩いたことをあくまで繰り返してゐます。検事は彼の言を疑つてゐます。しかし、そうした物語りも當然あり得べき筈のことであつたことを想ひ起して戴きたい。ジーキイ・ザーハルの熱烈に愛してゐた、その婦人は、夫の爲めに鞭打たれ、最後に彼女の悲鳴は證人の言によると「殺されかゝつた豚の樣に」全邸内に響き渡つた、と云ふことを想ひ起して戴きたい。かの半野獸的の夫は、無力な妻に對して殆んど信じ得べからざる、拷問愚弄惡罵をあびせかけた後、熱し渇いたる情慾の充足を強ひた、と云ふことを想ひ起して戴きたい。自分の戀人が如斯き情態に陷つてゐると云ふことを聞かされたとき、我々の中、誰がなほよくその心の均衡を保ち得るでせう！

私は、そうした恐ろしい、無技巧な物語りを耳にしたとき、被告が心に味つた、苦惱を想像することが出來るのであります。検事はこうした物語を耳にした後に彼の心の中には當然流血的復讐の念が生じた筈だ、と推測して居ります……。そ

れが、ザーハルよりも教養のある、より自由な、そして、纖細な感情の持主であつたなら、或は、當つてゐるかも知れません。理由は明かである、即ち、それに對しては彼は餘りに原始的であり、野蠻的であり、無智である。即ち、彼としては、グラヒラは兄の妻であり、法律上の妻であり……彼女と同棲することは、彼等の理解の範圍内に於て、全く、この上もない罪惡であつたのであります。彼の見るところによれば、彼自身にしろ、グラヒラにしろ——犯罪人であり、罪惡人であり、彼等の兄であり、夫に對して限りない罪人であつたのであります。彼は熱情の發作にかられて、道德的罪を犯しはしたが、一際は神の正しさに報を受けんとして居るのであります。故人がグラヒラ當人を折檻したこと、彼女の悲鳴が邸中に響き渡つたのにかゝはらず誰も彼女を救に來なかつたこと、ヂーキイの老婆が息子に忘れんとした革鞭を手づから渡したことを想ひ起して戴きたい。と云ふのは何故かと云ふに、彼等が一樣に考へてゐることは、次の點である。即ち、

若し妻たるものが、妻たるの務を忘れたとき、至乃は夫の名譽を損じたとき、彼女は當然如何なる苦しみをも忍ばねばならないと、そのことであつた。ところでザーハルと雖も徹頭徹尾こうした無智な社會の支配を受けてゐる一人である。官能的情熱に浸されたる彼は兄の妻を犯したのである、が兄に對する自からの罪過については勿論はつきりと自身の心の中に感じてゐたのである。彼が彼女を戀してゐたことは事實であります。彼が彼女との別離に憂悶してゐたことは事實であります。彼女の受難と彼女の變心の物語りが彼の心を轉倒せしめたのは事實であります。しかし彼には假令一瞬たりとも、彼が犯した如き行爲、それは明かに、夫たるものを侮辱するものであり、名譽を損するものである、とする兄の權利を疑ふ筈はなかつたのであります。假りにザーハルが兄の位置に在るとするも、彼は矢張りこれと尠くとも同樣な筆法に出でる筈であると云ふことは確言し得ることゝ思ひます。即ち、彼は戀人を見棄ることに、勿論、諦めをつけた。他に何と

も仕方がない譯ぢやないでせうか？　如斯きは悲慘を物語る我々お互の運命である。グラヒラが再び夫と同棲してゐると云ふことを知つた彼は、全く情熱的な嫉妬を感じ、煩悶のあまり、殆んど身の置き場所さへなかつたと云ふことは蓋し彼としては止むを得なかつたことではないでせうか……彼女は人妻であり、妻としての昔にかへつたことであらう！　離婚と不和とは彼等にとつては人生に存在すべきものではなかつたのです。尠くも彼等は、それを以て秘密關係よりも遙かに恥ずべきことであると、してゐたのです。即ち彼等の所謂、神の合せたものを人間が勝手に引き離すことは許されないことであつたのであります。そこで、絶望と嫉妬と煩悶に疲れた彼は、狂亂したものゝ如く夜を徹して原野に彷徨し、肉體的疲れによつて心の苦しみを鎭めやうとしたのであります……。彼が一度ならず地面に身を投げ、極度の絶望的發作に身を轉がしたことは、さもあるべきことであります。朝になり疲れはて、泥塗れとなり家に戻り……烈しい辛苦は鈍い痛

みに變つてゐたのであります。彼は室の片隅に身を寄せ、飲みも、食ひもせず、ものさへも言はなかつた……。極度の道德的擾亂の後、こうした鈍い精神狀態に變ることは誰しもが知つてゐることであります。こうした境地に陷つてゐる彼が、卒氣もない質問「夜通し原野で何をしてゐたか?」に對して彼は何と答へることが出來るでせう? 彼の答はたゞ「歩いてゐました」これ丈でした。こうしたことを彼自身でさへも想ひ出し得るかどうか?

私はグラヒラの姦通が發覺した、あの想ひ出の當夜、ザーハルが殺すと云つて兄を恐喝したと云ふ問題に就ては長くを語るまいと思ふ。爭鬪の最中にある場合あの位の脅喝があつたと云ふことは極めて有り得べきことで、熱し切つた彼が、猛りながら、「犬畜生を射殺てやるんだ」と叫んだとき、彼から鐵砲を奪ひ取つて、手荒く彼を部屋に押し込んだのであります……。こうした威嚇が、若しも、悉く實行を伴ふものとしたら、尠くも露西亞領土内には人間が殘つてはゐない筈であります。

被害者が死に先つて殘したと云ふ「叫び」に就ては、私は敢て斷言しますが、それは殆んど何等の證據もないことであります。即ち先づ第一に吾々は被害者の絶叫は、兎も角何を意味してゐるか知らないのであります。吾々は最も直接な證人であるグラヒラの證言は、勿論、彼女は戀人を助けんとする立場にあるが故に敢て信頼せんとするものではありまんが……。よし、それはそれとしても、私は檢事が、彼女はザーハルの母親と同じく低級な宗教信者で、心靜かに天命に順服してゐるのであると云ふ、そのことに就ては彼の言に矛盾があることを認めねばなりません。若しも彼女が僞つて證言してゐるものとするならば、彼女は心靜かに天命に服してゐる、と云ふことは言はれぬ筈ぢやありませんか。それにもかゝはらず、他の證人達は被害者は明かに弟の名を叫んだと言ひ張つてゐるのですが、しかし、ヂーキイ・キリームは、瞬間の中に絶命したものであり、彼の叫も、その斷末間の苦悶であつたと云ふことを想ひ起して戴きない。こうした叫びが遠く

の場所からさへ明瞭に聞き取れる樣な正確な句切のあるものであり得たでせうか？　その然らざることは勿論であります。それは正に絶倒せんとする人間の頓狂な悲鳴であらねばなりません。それにもかゝはらず證人達はこの悲鳴の中に實際に、はつきりとザーハルの名を聞き分けたと主張して居るのです。銃聲を耳にした後、先づ第一彼等の頭に浮んだことは、彼等が殺人事件の以前家庭内に迫つてゐたところの不吉な雰圍氣に就て、常日頃それとなく豫感してゐた被告のことであると云ふことを想ひ起して戴きたい。彼等が日頃そう思ひ込んでゐたればこそ被害者の頓狂な悲鳴も彼等には、それが明かに名を呼んだ如くに聞えたものであらうとは極めて容易に推測され得るのであります。それは極めてそうあるべきことではあるが、今一歩を譲つて、被害者が正しく弟の名を呼んだものとしても……それは一體何を證明するでせう？　發砲の閃光で被害者は、被告であると云ふことを認め得たと云ふのでせうか？　馬鹿らしい話だ！　それは不可能な話で

す。何となれば、眞近の目の先で起つた發砲の閃光は被害者の目を眩し、その瞬間發光の方向の源に居つた加害者は、その相手方からは絶體に認められ得るものでないと解せられるのであります。しかし、それに就て想ひ出されることは、被害者は以前より絶えず弟の襲撃を顧慮してゐたことであり、曾つて何人かゞ彼に石を投げつけたことがあり、しかも、その折ザーハルは農舎に居たものであり、且つ目撃してゐた總ての人々が、それは白痴のビョーテニカの手業であることを告げたにも拘らず、彼は切に「ザーハルの仕業」だと、訴言したのであります。其處には既に彼の生涯を通じて思ひ込んだ執念があり、彼は自分に死の手が迫つてゐることを豫感して居り、意識の最後の瞬間、勿論彼は彼の頭の中にある弟の名を叫んだものであるとは解し得られないでせうか？

かるが故に、今、假りに「ザーハルが殺した」と云ふ先入觀念を棄てるなれば、數へられたる總ての證據物件、並に心理的考察は、何等の根據のあるものでない

ことを發見するのであります。心理的考察に關しては猶ほ數語を費したいと思ひますが、その以前に暫くの間、證人取り調べの際、我々の知らんと欲した問題、並にその問題は檢事が、被告の無罪說の有力になることを欲せなかつた爲めに、なんとなく、曖昧に葬られた、そのことに遡つて一言して置きたいと思ひます。

卽ち、ザーハルにとつて、彼が夜の九時に農舍で馭者と別れ、十一時には旣に其處から二十露里は十分距つてゐる邸の近くに現はれ、犧牲者を待ち伏して、殺したと云ふことは、全然有り得べからざることを再び繰返し、高調する次第であります。距離が間違つて居るとか、耕地から谷を越え、沼を渡つて行けば、距離は十八露里に短縮される……と云ふが、それはとりも直さず露西亞特有の道程で、田舍女が棒で測つた道程を示したところのものであることを、忘れてはなりません。馭者の言ふところによると「十八露里も危い」……とのことだが、しかし私は私の信ずるところと、責任あるものゝ實測とを根據に次の如く斷言し得るのであ

ります。卽ち先づ第一に、それは十八露里ではなく、兎も角くも二十露里は下らぬこと、第二に、この道路は耕作された畑や、谷の爲めに步行に不便であり、馬で行くでさへなか〳〵の困難で、彼が休みなしに駈け通すが如きは、全然不可能なことであるといふことであります。假令、ヂーキイ・ザーハルが如何ほど、興奮狀態にあつたとは云へ、この路を駈け通したら、邸に達しない前に、心臟が先にまゐつてしまふ筈であり、それ程までに行かないまでも、その足で直に引き返し農舍に戻り得る精力があるとは、どうしても考へ得られないことであります。

私はこの點を主張し、百度もこの點を指摘し、そして彼等が眞面目にこの問題に係はり得る良心を、法廷から希望する次第であります。若しも彼等がそうするならばザーハルの兄殺しの問題は、その論據とする條件が、盛り立たざることに尠くも、公明に、計統的に反證され得るものなることを、私は信ずるものであります。

殺人事件後、並に被告の收監後に於ける事件關係人の態度は、絕體の刑罰の前

に彼等の受身を從順に示したものであるとした檢事の說明は、眞に近いものであります。勿論、總ての彼等の見るところに據れば、乃至は彼等流の特別な觀察によれば、ヂーキイ・ザーハルは重罪を犯したものであり、それが爲、罪せらるべきは當然であつた……。しかしその罪は殺人罪を犯したからではなく、實兄の妻との關係に對する致命的の——罪に對してゞあつたのであります。それは親族相姦罪であります。智識階級に屬する檢事として、この範圍に於て犯された罪に對する彼の考察、並に批判は、異つてゐるのであります。彼にとつては、他の智識階級同樣に、殺人は立派な重罪であるが、義姉との關係——それは場合によつては屢々救さるべき罪であり、特に、若し、義姉があの如く誘惑された場合は然りであるとされて居るのであります。こうした事件は、智識階級の社會に於て屢々見ることで、そうしたことに對して、顏一つ赤らめるでもなく、差して神經にも止めてゐないのであります。我々は本事件の英雄を生み出したところの、原始的無

智な社會に對する觀察と理解と云ふものから、餘りに距ることが遠いのであります。我々にはこうした恐ろしい生活がよしそれが兄の妻とであらうと、一つのお色事として、何でもないこととして、許され得やうとは夢にも思はないのであります。然しその點に就ては檢事は異つた意見を持つてゐるのであり、彼等（智識階級）の言ふ重罪なるものは、殺人罪なるや、親族相姦罪であるや、を言ふことは困難であります。しかるに一方あの社會（被告の屬してゐる）に於てはあらゆる不幸は神の刑罰を以て說明されてゐるのであります。

キリーム・イワーノウキッチの慘死したことが、その彼に對して、自己を罪あるものとしてゐる人間に、どれ程の恐ろしい印象を與えたことでありませう！。彼は兄の許から妻と名譽をも盜み、彼は彼の名擧を傷け、兄を侮辱した。兄は死によつて、侮辱され、惱まされたる生活から永別したのであつた。露西亞人の懺悔は常に、一步を後れて從つてゐる……と云つた檢事の言は蓋し眞理であります。

す。ヂーキイ・ザーハルは重い罪を犯した――神はこの罪によつて家族一同を罰し給ひ、そして彼等は、無窮なる神の意志の前にひれ伏してゐるのであります。ザーハルは戀を拒否することによつて、歡樂と幸福を拒否することによつて、當然自己の罪を償ふべきを心に誓つて居るものであり、一方、母親と戀人とは、心靜かに彼の決心を受け入れてゐるのであります。被告自身からも、及びその近しいものからも、彼の運命に對して冷淡の如く見ゆるのは、卽ち、これが爲めであります。それは冷淡ではなくして、從順であり、神の意志の達成であり得るのであります。

茲に於て檢事は言つてゐる、卽ち、ザーハルは人殺しをせり、何となれば彼は殺さざるを得なかつたからである……と。しかし、私が諸君に言はんとすることは反對であります。彼は人殺しをせず、何となれば、彼には、爲し得なかつたからである、と。彼はかつて兄を殺害しやうなどと、實際に決心したこともなく、

彼としてはそれは、この上もない罪惡なりと信じてゐたのであります。

諸君の面前に居るのは、否！　殺人犯人ではありません。彼は、自己の情熱に心をとり亂されたる、不幸なる一人の人間であります。彼は不幸なる事情の下に正に犧牲とならんとしつゝあるのであります。然らば一體、誰が眞の犯人であるかと諸君は反問するのでありませう！　私は、こゝに言明は出來ないのであります。今私の手許には何等の推定すべき材料がないのであります。それと云ふのも豫審の餘りに遍した罪であります。しかし私として諸君に、是非とも氣付いて戴きたいことは、感情の激した結果、ヂーキイ・ザーハルが、口にしたと云はれてゐる問題の嚇し文句「犬畜生を射ち殺してやるんだ」は、それを耳にした多數のものがある……その中に、被害者との勘定を帳消しする爲めに、こうした事情を利用し、嫌疑を他に轉化しやうとした人間が、ないと、誰が斷言し得ませう？　犯人は、家庭内のものではなく、參考人中に居ないと誰が斷言できませう？　若

しも、犯人がそのとき、家庭内に居合はせたものゝ中、誰かであるとするならば、あの呪はれたる鐵砲の出處は明瞭になつて來る譯であります。然しこのことは私の單なる臆測に過ぎないものです。私は、決して、今日、この席上で觀察した樣に、罪人を作らん爲め、何等の眞面目な證據もないのに、強いて、無罪な人間を、罪ある如く裁かうとするが如きそれではありません。以上諸君に十分信じて戴くと云ふことは、恐らく、私の力の及ぶところではないかも知れませんが、然し私は、こゝに辯護士としてゞはなく、人間の一人として、心から私の說明によつて諸君に訴ふところは「不公正なる裁判こそ、再び取り返しのつかない、恐るべきものなることを眞に考慮して戴きたい」といふのであります。』

辯護士の辯論は終つた。彼の辯論が、ザーハルの無罪なることに就て、眞に何人かを說得し得たかは、言明するに困難であつた。彼の無罪論はその多くの部分に於て、餘りに抽象的のものであつた。しかし多數の人達に反省を與へたことは

疑ひなかつた。あらゆる場合に於て印象は強いものであつたが、殊に辯護士の言が、不幸な、心の混亂した人間のことに及んだとき、突然彼告が哭き出した。そのことが一層、一般に感動を與へた。

辯護士の雄辯には何等の感銘をも持たない裁判長から「陪審官は眞面目に審議せねばならない」と云ふ樣なことを紋切型の筆法で、長い淳々しい、無味な挨拶のあつた後、陪審官の紳士連は——次手ながら說明して置くが、彼等の殆んど全部は市場の商人である——會議室へ引き揚げた。

彼等が去つて後、約一時間と云ふものは、構內は殆んど混亂狀態であつた。或る一部のものは先きに、たあいもなく、檢事の辯論に心を惹かされたことを後悔さへしてゐた。聽衆は互に囁き合ひ、辛抱出來ないもの丶樣に閉された會議室の戶に視線を投げてゐた。當のザーハルは、ぢつと動かず首を垂れてゐた。

突然會議室から物音が聞へて來た。同時に全部のものは身を顫はした。戶口は

開かれ、長い黒い列を爲した陪審官連が場内に現はれた。その中の長老である、白髯を蓄へた商人のミロスラフスキイが殊更に、物々しく、威嚴を作り、宣告狀を手にして進み出た。彼の顏にやゝもすると現はれんとする、感激と憐憫の情を彼は努めて押し隱さうとしてゐることが目立つて見えた。多くの人達は、運命の一言

『有罪を宣告します』

と告げられた後も、なほ彼の顏を見つめてさへゐた。

老人は素速くザーハルに一瞥を投げ、顏を背けた。彼の兩眼には涙が光つてゐた。

十四

辯護士のドウホウエッキイは市場の空地に建てられた唯一の家らしい家である宿屋に滯在してゐた。その家は漆喰なしの煉瓦で組立てられてゐた爲めに「赤い家」と呼ばれてゐた。彼は最上の一室を撰んだのだが、それでも相等に汚なく、南京虫にも可成りの心配を要する程度のものであつた。

裁判の閉廷したのは、夜もふけてからの事であつた。ドウホウエッキイとしても、明日の晝頃には停車場へ向けて出發する都合になつてゐたので、一先づ宿に引き揚げて來た。彼は心の底に痛く、動搖と、焦燥を來してゐた。

彼はザーハルの無罪なことに對して些かの疑念をさへ懷いてゐなかつた。それだけに、あの突然な宣告は、彼をして殆んど失神せしめたのである。茶を準備することを命じた後、彼は鼻を顰め、肩を縮めながら、長い間部屋の中を前後に歩きつゞけた。時々窓際に近づき、ほんの暫くの間廣場に目を向けた。あたかもその寂寞と暗黑の中に、何か思ひがけない結果に對する說明を見出さうとするかの如くに。

町は全く暗闇の中に沈んでゐた。只警察署の建物の側に取りつけられた外燈の光線の下で、水溜りが微風を受けて顫えながら、僅かに燦いてゐるのみだつた。

ドウホウエッキイの眼前をば、恰も生きて動いて行くかの如く、陪審官、その中の白髯の老人、證人達、グラヒラと母親、被告が通り過ぎた。それは亦、何とした奇妙な謎の樣な人達であつたらう！。辯護士の心中は、感情が混亂してゐた。彼の鋭敏な、神經質的な鼻はある何ものかを嗅ぎつけたかの如くであつた。

それは、理性の說明することの出來ない、彼にも氣がゝりになるものであつた。

家の中は死んだ樣な靜肅に包まれ、部屋の中は黴臭く、埃と、南京虫の臭がしてゐた。

誰か靜かに戸口を叩いてゐるものがあつた。

『お這り下さい！』とドウホウエッキイは叫んだ。

戸はゆるやかに開かれて、黑い肩掛で頭を包み、白い聖像の樣な面をして、丈高い婦人の姿が現はれた。彼女につゞいてなほ一つの、どことなく野鄙で、不作法な姿が、彼女の背後に隱れた。ドウホウエッキイは被告の母親であることに氣付き、恰も事件の最後の間際に於ては自分が唯一の責任者でもあるかの如く、氣まづい氣持になつた。

『あゝどなたかと思ひました』

『先生樣私共は――』と老婆は叮重に膝の邊まで頭を下げながら、端正に答へ

た。背後の粗暴な姿の持主も同じ様に頭を下げたが、これはてんで端正どころでなく、どことなく阿呆者らしく素迅くやつてのけた。それはドウホウエッキイも曾つて會つたことのある、白痴のビョーテニカであつた。

『私共はあんた様に用があつて參りましたものでございます』と老婆は言をつふけた。

『どうぞ、お掛け下さい。お茶は如何ですか？』

とドウホウエッキイは我にもなく遜てた。

『有難うございます、どうぞおかまひなく、私共は今お茶どころではございません』と老婆は辭退し『ですが掛けさして丈けは戴きます。足の工合が惡いのですから』

老婆は兩手を肩掛けの中に隱し姿勢正しく坐り、未だ涙に乾いてゐない爲めに僅かに赤走つた兩眼を辯護士の方に向けた。

ドウホウエッキイも同じく坐つてゐた。沈默が襲ふた。

『伜は罪の云ひ渡しを受けました！』そう云ふ老婆の聲は顫えてゐた。

『そうです！』とドウホウエッキイは聲を落して『私にとつても實に意外です！　それは、何等かの恐ろしい誤解からです！』

突然彼は、自分が何かの不安に襲はれてゐることに氣付いた。その何かと云ふのは、母親の背後に立つて、彼にぢつと注がれてゐる、奇しき穿鑿的な眼眸をした白痴の小さな兩眼であつた。ドウホウエッキイは、嫌や〳〵ながらも二度程、その方に目を向けたが、白痴は眼瞬一つしなかつた。

『しかし、あなたはお歎きになる必要はありません。――辯護士は更に語を次いで――事件は未だ絶望と云ふ譯ぢやありません。他の陪審委員會では、恐らく結果は全然別なものであるかも知れません……。若しお差し支へなければ、あなたの爲めに歎願書を作製して上げてもいゝんですが、それとも……。――ドウホ

ウェッキイは突然、心に亂れを來たしながら――それとも、あなたは事件を他の辯護士にお渡しになる希望でございますか？』

老婆は頭を振つた。

『いえ、どう致しまして、あなた樣！　私共には他の人に用はありません！私共は、あなたに非常に滿足してゐるのであります……神樣が、あなたに幸福を與えますやうに……。爲す丈けのことは爲しました。皆樣が話してくれますし、裁判のことで……泣いてさえくれました。』

老婆は片手を上げ、肩掛の端で眼端を拭つた。

『いゝえ！　そう云ふ譯で總ては神樣の御心にあることです！　それは濟んでしまつた事です。今更あなたをお煩す歎願書の必要もありません……神樣があなたと共に在ります樣に！』

『と、しますと、それはどう云ふことなんですか？　上告をお拒みになるんですか？』とドウホウエッキイは吃驚して尋ねた。

『あなた樣！　それは私共に用のないことでございます！』老婆は肩掛けの下で輕く手を振り、目を伏せた。

ドウホウエッキイは始んど氣拔がしてしまつた。彼としては反對に定罪者の救免に對する普通の涙、歎願、辭儀と、お祈を期待してゐたのである。

『ですが、判決は取り消すことが出來るかも知れんぢやありませんか……。私としても殆んど確心さへあるのでございます。』

『いえ！　いえ、こうなつた以上は……――老婆は眼を伏せたまゝ、そしてどうやら語尾を濁らしながら反對し――こうなつた以上は、事は終つたのでございます』こう繰り返し、老婆は眼を上げた。

ドウホウエッキイは腕を組み合せた

『苦役に追ひやられるとしても？　どうでもなる樣に放つて置かうと云ふんで

すか？　どうも私には合點が行きません……。勿論それは御自由ですが、然し當の本人自身もそのつもりなんですか？　私は義務としても……』

『あれも、矢張り、拒んでゐます。あなた樣！　伴にも會つて來ました……裁判長樣のお許を得まして……神樣あの人をめぐみ賜へ……私は今獄舍からの歸りなんでございます……息子も拒んでゐました。あなた樣、矢張り拒んでゐるのでございます』

ドウホウエッキイは殆んど途方にくれ、腕拱いで、言ふべき語を知らなかつた。重苦しい沈默の狀態が支配した。

老婆は思ひに沈み、薄い落ち込んだ唇を嚙み、嘆息を漏し、そして立ち上つた。同じくドウホウエッキイも急ぎ座から立ち上つた。

『どう云ふ譯で、あなたは思ひ切つてお拒みになるんです？　妙な話です。どうしても妙なことです！』

『私共は既に決心したのでございます。あなた樣！　他に仕樣がないのでございます。あなた樣の御盡力は心から感謝してゐます。神樣があなたに總ての幸を與へます樣に！　どうぞ、神樣の前に、お疑のない樣に。私共は非常にあなた樣に滿足し、永久に忘れはしません……。ベーチカ！　お辭儀をしなさい！』老婆は突然振り向いて背後に隱れてゐた、白痴を引つ張り出し乍ら、ぞんざいに叫んだ。

白痴は吃驚したものゝ如く、目を見張つた。それは母親に對してゞはなく、辯護士に對してゞあつた。そして素早く頭を下げた。彼の形相は全く野獸のそれの樣であつた。

『お手に口吻するんですよ！　お馬鹿！』老婆は鋭く命令した。

『若し、あなた？　お靜かに、どうしたことなんでございます？』ドウホウエッキイは仰天して、こう早口に言つた。

『では、これでお暇致します。どうぞ私共を惡く思はない樣にお願します！』こう云つて老婆は肩掛の下から片手を延し、サモワールの側の机の上に大きな包み物を置き、『左樣なら！』と別れをつげた。

『左樣なら！』とドウホウエッキイは聲の調子を落してそれに答へた。

『サ、お前……行くんだ！』と老婆は息子に命じておいて、今一度叮嚀に頭を下げ、息子を先に追やりながら出て行つた。戸口は閉され、そしてドウホウエッキイは只一人全くの疑惑の中にとり殘された。

『どうしたことなんだ？　俺にはさつぱり判らない！』こう彼は一人聲高く言ひ放つた。そこには彼としての悲哀がない譯ではなかつた。だがそれが何であるか、彼は實證することが出來なかつた。

『贖罪の欲求と云ふものは、實際左樣のものであるだらうか？　だが、彼は罪を犯してはゐないぢやないか？　これやあ！　一體どうしたことなんだらう！

奇妙な人達だ！。』

それは彼にとつては惱ましき一夜であつた。南京虫は遠慮なく喰ひ付くし、どう云ふ譯か判らないが、白痴の阿呆らしい野獸的の口端が絶えず彼を喫驚せしめた。

翌朝、ドウホウエッキイは、豫ねて準備してあつた馬で、そろ〳〵と町を出發した。彼は、草木の生ひ茂つてゐる曲りくねつた道路があり、荒寞とした廣場があり、小さな人家と、蕭洒な敎會堂のある、こうした田舍町を愛してゐた。こうした田舍町の一つに彼は生れ、生ひ立つたのである。だが、それは隨分久しい以前のことであつた。

市場の中には、泥々とした、光つた水溜りが出來てゐた。肩掛に身を包み、泥の跳ね上つたスカートに、大きな長靴を穿いた、物賣女達が、それ〴〵、自分の持分の販臺の側に坐つて、駄菓子、干種子、干魚を求めに來る買手を待つてゐる。二つ三つの百姓の荷車が梶棒を上げたまゝ廣場の中央に立つて居り、腹ばか

り太つた、やくざ馬が首を下に延しして車の側のどぶ溜りに、まるつきり、浸つてゐる干草を嚙んでゐた。この田舍の小さな町は廢退と、荒凉との不思議な印象を心に生ぜしめるものであつた。窓の中には、それを透して見えるモスリンの窓掛と、壺に差した花とが、恰もそれがドウホウエッフキイから悉く隱れてしまつた如く何一つ生氣の影を見せてくれなかつた。たゞ木造の橋の上ばかりは、時折り、長靴を穿いた、將校らしい人が通り、卷毛をした、そして、餘りに、けばけばしく裝つた婦人が、思はせ振りに駈け過ぎ、茶色のスカートに黑いエプロンを掛けた二人の女學生が駈け過ぎた。最後に明るい、派手な絹の肩掛をした、肥つた商人風の女房が通りすがつた。

ドウホウエッキイは、突然、曾つて妻がこうした肩掛を買つて來てくれと、彼に賴んだことのあることを想ひ出した。それはその當時上流社會にさへも流行されたのであつた。彼は、彼が生涯を通じて三年間同棲した、若く、善良にして、

愛らしかつた妻の記憶を回想し、優しい笑を泛べた。こう想ふにつけても、彼はポケットの中の脹らみに氣持よい刺戟を覺えながら、『買つて行かずばなるまい』と決心し、商人の内儀さんに追ひつき、帽子を上げ慇懃に、『失禮でございますが……只今あなたがお召になつてお出になります、そうした肩掛はどちらで、賣つて居るのでございませう？』と尋ねた。

商人の女房は、昨日裁判所へ來てゐたので、一目で辯護士であることに氣付いた。彼女は思ひがけなく氣持よい言葉をかけられた爲か顏を赤らめて立ち留り、音樂的の口調で次の樣に說明し出した。

『この品でございますか。それでしたら、この廣場を向ふにいらつしやいまして……そこに「ショバ」がございます。それを左手に見て行きますと……すぐにミロスラフスキイ商店と云ふのがございます……クヂマ、セルゲイウキッチ樣の店でございます……そこでお需めあそばせ！』

『有難う！』と言つて、ドウホウエツキイは今一度帽子を上げ、どうやら腑に落ちない、變挺な言葉の所謂ショバ（嗘と云ふ名を與へられた建物）と敎へられた方向に進んで行つた。

一方商人の女房は、恰もこうした氣持のいゝ話相手と別れるのが殘り惜しいかの如く、そのまゝ往來の眞中に立つて、彼の背後から聲をはり上げた。

『まつ直ぐです……どこまでもまつ直ぐにお行きになるんです……ミロスラフスキイ商店と、お忘れのない樣に！……』

ドウホウエツキイは微笑を以つて會釋もしたが、水溜りへ欺り込まない爲めには、それどころではない、氣が氣でならなかつた。

ミロスラフスキイ商店の中は薄暗く、ぢめ〳〵してゐた。兩側の壁には長い棚がつゞいて居り、それには更紗、綿綾織、繻子などがごつちやに置いてあつた。キャラコの臭ひが鼻をついた。店先には十五六才位の活潑さうな少年がつつ立つ

て居り、帳場には白髯の商人が、たつぷりと軀を椅子にうずめ込み指を擴げ、小皿から出がらしの沸き立つた熱湯の樣な茶をすゝつてゐた。客が來たことを知ると、彼は直に小皿を置き、ゆるやかに立ち上り、自分の厚い綿帽子を取り上げた。

『どう云ふお品をお需めになるのでございますか？』と老人は鹿爪らしく尋ねた。

ドウホウエツキイは希望の用件を說明した。

『それでしたらお間に合せ出來ませう！』商人は如何にも落ち着き拂つて承諾し、『ウオローニカ！、その品をお見に掛けてごらん。あーと、それぢやない。二段目の棚のを持つて來てごらん……あなたは派手なのをと、おつしやいましたネー』

『左樣です、一番派手なのをお願します！』

『ウオローニカ！、判つたかな!!』商人は店員にこう云ひ置いて、再び叮嚀に

客の方に向き直り『若しや、あなたは、ドウホウエッキイ様でないでせうか？』
『左様ですが？』辯護士は喫驚し、そのとき始めて商人が誰であるかに氣が付いた。
『あゝ、あなたは昨日、委員長になられた方でしたねー』
『それに違ひありません！』と老人は勿體振つて、念入れに答へた。
店員が買物の肩掛を包裝してゐる間、ドウホウエッキイは商人と會話をつゞけた。
『ときに如何なものでございませう！』と彼は話を切り出し『今となつちや、事件も既に過ぎ去つた後のことではございますが……だが、昨日の、あなたの判決はどうも、正當ではなかつた樣でしたねー』
『正當でないんですつて？　いや！　どうして正しいものですよ！』と老人は反駁した。

『しかし、失禮ですが、眞の犯人は彼でないことは確かです！』と、鼻をしごき乍らドウホウエッキイは熱して聲を張り上げ、『私はその事實を確信して居ればこそ、あなたの前に公言して憚らないのです！』
老人はしばらくの間默り込んでゐたが、
『さあ！　何と云つたつて……正しいことは、正しいに違ひないんです。打ち明けて云ひますが……殺したのは、彼ではないんです！』商人は突然、言葉を中斷して一方を睨めた。
ドウホウエッキイは餘りのことに茫然とした。
『彼ではないと云ふんですか？』
『彼でないことは判り切つたことなんです……ザーハルは殺人をしたのぢやありません。殺したのはあのお馬鹿の……ビョーテニカなんです。それは私達皆がよく知つてゐることなんです。』

尠くとも、こうした、ざつくばらんの打開話を耳にしやうとは、ドウホウエッキイとしても今の今迄豫期しなかつたことである。よし彼としても、殺人犯人は家庭内に居つたものゝ中の誰かであると云ふ豫想は、明言もしたとは云へ、それが白痴の手業であらうとは、只の一度も思ひ浮べなかつたことである。

『成程？　馬鹿の仕業であつたんですか？』と彼は早口に言ひ切つた。

『だが、あなたは白痴のビョーテニカをまだご覽にならないでせう？』

『いや、見ました！』

『あ！　左樣ですか、彼が殺したんです！』

『しかし、奇しいですね！』

『何にも奇しなことはありませんよ！　私共は既にずつと以前から知つてゐたんですが、默つてゐたんです。ビョーテニカが、自分で殺したんです。あなたが犯人は恐らく、家の中に居つたものゝ仕業だと、おつしやつたことは非常に正しい觀察でした……。實際その通りで。』

ドウホウエッキイは、しばらくの間默り込み、商人に對して驚きの目を向けてゐたが、商人は落ち着き拂つて彼の顏を見守つてゐた。

『扨て、それはそれとして……』辯護士は口籠りながら『しかし、では、どうした譯なんです　…若しあなたが知つてゐたとしましたら……。失禮ですがあなたは無罪の人間と承知しつゝ、彼に對し有罪の判決をしたと云ふ譯ですか？』

『えッ！　無罪のものにですつて！　そんなら誰が罪人だとおつしやるんです？』

『それは、あなた自身が言つてゐるぢやありませんか？』

『私は、手を下して殺したのはビョーテニカだと云つてゐるのです……ビョーテニカが實際に殺したんです。しかし總ての原因はザーハルに在るのです。ビョーテニカは彼の爲めに兄に發砲をしたと云ふ譯です。彼は非常にザーハルを愛して居り、ザーハルが家から放逐されたその日から、白痴は慕ひ出したのです……

従つてグラヒラを氣の毒に思ひ出した譯で……何と云つたつて白痴のことだ！
そうすることがどれ程の罪を作ることになるか知らないんです。白痴自身には寧ろ神聖なことであつたでせう！　彼が事件のいきさつを理解してゐたでせうか？
故キリーム・イワーノウキッチは、氣むずかし屋の短氣で、白痴を虐待したに對し、二番目の兄は彼を甘やかし……小使や、砂糖菓子を與へたのでした。そこにお馬鹿が殺した理由があるんです。彼はザーハルを、窮地から救ひ出さうとしたんです……勿論馬鹿なりの考へでしたが。で、今となつてはどうでせう？　彼を裏切つた譯ぢやないでせうか？　彼は自ら罪を招き人間的精神を絶滅し、最後に自分を地獄の底に陷し入れたのです……。だが、これと云ふのも、一つに原因はザーハルに在るんです。彼が弱點に屈服しなかつたら、彼が兄の妻を誘惑しなかつたら、何にも事は起らずに濟んだと云ふものです。彼はその犯した背神の行爲に對して自身責を負ふべきが當然でせうか、それとも負はざるのが至當なんでせ

うか……あなたの御意見は如何です？』
『さあ！　私の意見としてみたところで、兎に角、彼は人殺しはしなかつたんぢやないですか？』
『あ？　あなた！　それやあ！　發砲した者が必ずしも殺したことには限りませんよ！　發砲したのは只今あなたも御承知の通り、或はお馬鹿の仕業かも知れませんがザーハルは自己の精神を殺しました。彼は自分自身を、理由なくグラヒラをも、兄をも殺してゐます……責を負ふのは其の爲めです。彼の苦難に對しては恐らく神樣も彼をお許し下さるでせう！　責は負ふべきです。我々の仲間としても矢張り皆の意見が一致してゐたと云ふ譯ぢあありません……私はその人達に言ふてやりました、「議論はもう澤山だ。罪と決して置け！　若し無罪だつたら……それやあ！　神樣のおきめになることだ！」と、そう云つてやりました。』
『あなたも、亦、隨分、妙な裁斷を致したんですねー』と、ドウホウエッキイ

はつぶやく樣に言つた。

『それが、まあ！　私共流の智慧からの裁判と云ふものです！』と、別に氣にとめる樣子もなく、老人は答へた。

『然し、失禮ですが、母親も、婦人も承知の上なんですか？』

『勿論です！』

『それでも、沈默してゐるんですか！』

『罪を知ればこそ、沈默してゐるんです！』

『では、併し、私を招いた理由がないではありませんか。』

『さア！　それが女と云ふものなんでせう。婦人はザーハルを愛してゐます。ですから、何とかして……と云ふのが、あの婦人達の氣持ちなんです……神樣さえ見捨なかつたら、罪になる筈はないと思つてゐるんです……それが、まあ！神樣の御心と云ふものでせう！』

『しかし、失禮ですが、私は辯護士として、事件の再審査に就て申請を餘儀なくされるものであります……』

『それはあなたのお勝手ですが、たゞ私共としてはおすゝめしないまでのことです！』老人は再び一方を瞶めた。

『しかし、事實の眞相が判つた以上、私として職務上からも默過することが出來ないと云ふことはご承知でせう！』

老人は意味あり氣に、せゝら笑つた。

『だが、お前さんに、どう云ふ事實が、判つたのです？』

『それは、たつた今、あなたが……』

『たつた今、何をです？　私は何も云はんぢやありませんか！』

ドウホウエツキイは、むつと心に怒りを感じ、その爲め彼の顏が赤ばしりさえした。

『本當にあなたはたつた今、自分で口外して置きながら、それを言はないと云つて否定なさるんですか？』

『勿論否定します！』

『併しそのことに就ては、あなた自身、よくご存じの筈です……』

突然老人の顏は嚴かな、深刻な表情に變つた。彼は、恰も誰か立ち聞きしてはゐないかを氣づかふものゝやうに、戸口の方をのぞき見、『ウオローニカ、外に出て……少しの間、立つてゐてくれ！』と店員に呟ひ付けた。少年は意味あり氣に彼を眺め店先から出て行つた。

『實はこう云ふ譯です！』と老人は語り出した。

『あなたに未だお話ししませんでしたが……それは簡單なことなんです。そんなことは勿論、お前さん方、敎育のおありになる人達にとつては、一寸お考へになれば、お判りになることかも知れませんが……ほんの僅の間、私の言ふことを聞い

て戴きたいのです。私はお前さんに惡いことは云はないつもりです……と云つてそれは毒にも藥りにもならないことで、結極なんにもなりませんかも知れませんが……。眞くのところザーハルは人の云ふ樣に氣の毒……な青年であり、彼は眞實な、正直な人間です……。ですが、お前さんがお考へになつて、今彼の爲めに辯明し……放免して見たところで、その先どうなるんです！　彼の心の中には生涯硬い石が横はる樣な結果になるでせう！　良心は彼を内から嚙むでせう。何と辯明しても兎に角、彼の罪惡のお蔭で、その兄も懺悔のない死方をし、お馬鹿はその生氣を滅し、その不名譽の家庭内の生活と云ふものは、まるつきり墓場の生活なんです。こうした罪惡を心に秘めて、尙、彼は生活して行けませうか？　お前さんにくれ〴〵も云ふて置きますが、あの家庭内は空つぽになつてしまいます。グラヒラも亦自身煩悶し、恐らく自殺でもすることでせう……。そうしたことに比べれば苦役が何です？！　しかも苦役の後にも生活してゐる人は澤山あります。

何でもない事だ、辛抱してゐる中には心も清かになつて來るでせうよ……。放つて置いて戴きたいものです。このことをお前さんに申し上げて置く譯です！』

老人は、それと感づくことが出來る程心の擾亂を來し、その聲は顫えてゐた。

ドウホウエッキイは暗い惱しさと、何かしらある恐怖をさえ覺えた。

『だが、私として、他に仕樣がない譯ぢやありませんか……私の義務と云ふものも考へて見て戴きたいのです……』と彼は物憂げに呟く如く云つた。

老人は默つて口を開かなかつたが、顏には明かに惡意を含む色が出てゐた。

ドウホウエッキイは殆んど哀願するやうに彼の顏を見守つた。

『あなたの見地を以てするときは或はあなたも正しいかも知れませんが……併し私は亦、私としてあなたと異つた見解にあることも、止むを得ない譯です！』

『だから、あなたの勝手にするがいゝと、既に言つてゐるぢやありませんか！』

と老人は意地惡げに、言葉の調子を落して云つてのけた。

『無罪を知りつゝもその人間を苦役に見送ることは私として、どうして出來ませう？』

老人の顏は暗く、險しげになつた。

『あなたに、私と云ふものがお解りですか？』

『私共には解ります』と、老人はついに、恰も力が盡きはてた如く、目を伏せたまゝ答へた。『そうだ、あなた方には、私共と云ふものがお解りにならないのです』

『いや、どうも、參りました……併し……』ドウホウエッキイは全く力なく云つた。

老人は默つてゐた。

『恐らく、あなたのおつしやることは眞當のことかも知れません！』

彼等は言葉なく默り込んだ。ドウホウエッキイは、何となく重苦しい氣分にな

り、そして氣まずい思がした。恰も自分が何か知ら、ある點に就て正當でない樣な氣さへした。

『それでは、左樣なら！』と彼は言つた。

『失禮致します！』

ドウホウエッキイは帽子を取り上げ、思ひ殘りでもあるやうに、元氣なく出口に方に歩いて行つた。

『買物をお忘れでございます！』と商人は後から聲をかけた。

『あ！　そうでした』

ドウホウエッキイは包物を手に取り店を出た。彼の心は全くぼんやりとしてゐた。

商人は不承無承に彼の出て行く後姿を見送り、そして帳場に戻り、冷くなつた小皿を兩手に取り上げた。

一方ドウホウエッキイは荒漠とした、濕氣の多い原野を、停車場に向つて急いだ。頭上遙かに鳥が啼きながら飛び廻り、老人の欝いだ險しい面が執拗く彼の面前につきまとうた。彼は如何にも不愉快な、物憂げな氣持であつた。彼があれ程熱心を持つて、そして政黨の一人として、十分な腹案を準備し、敏捷に參加したところの、あの熱し切つた事件も、突然彼には別なものに變つてしまつた。即ちそれは、彼にとつては、恰も血を以て染めた混亂した、傷ましいものとして殘されたのである。彼は視線を伏せ、かすめ去る汚ない路面を見つめ、思にふけつた。

――『そうだ、我々にとつては彼等と云ふものは謎だ！　我々はあらゆる言葉をつかつて彼等を語らふとする。罪の報？　それは一切の罪に、流血の慘に、懲罰に、貧窮に、耐え忍ぶこと！　それが果して野蠻からであらうか？』

否な、それは恐らく……

見渡す限り十露里は、赤、綠、黑の畑地の擴りであつた。紫色の地平線は限り

ない空の彼方に消えて、溶け合つてゐた。集つてゐた鳥の群は路筋からいづれへか飛び去りつゝあつた。濕氣を含んだ風が烈しく吹きすさんで、あたりは寒かつた。

ドウホウエツキイは、外套の襟を立て、そして帽子を面深く押し下げた。

（おはり）

一九一七年モスクワに於て

著者

大正十四年九月十二日印刷
大正十四年九月十六日發行

飜譯者　佐野英

發行者　東京市小石川區林町三六番地　中川德太郎

印刷者　東京市牛込區山吹町一九八番地　大杉直次郎

歌性
定價壹圓八拾錢

發行所　東京市小石川區林町三十六番地　至上社
振替東京六七八八二番

發賣所　東京市神田區錦町　慶文堂

【大杉印刷所印行】

ii L35

至上社飜譯文藝書

ロマン・ローラン作　布施延雄譯（四版）

アンネットとシルヰィ

四六判上製・定價二圓五十錢・送料十錢

姉は聰明なる頭腦と豐かな感情を有つた理想主義の女性、異母妹は晴れやかで、大膽な戀愛の實行者。ローランはこの二人の典型的女性を描きつつ氏が女性に對して有する凡ゆる理想を叫んでゐる。ローラン最近の大作。

シャルル・ルイ・フィリップ作　井上勇譯（三版）

貧と母と子

四六判上製・定價壹圓八拾錢・送料六錢

近代佛蘭西文壇に於けるプロレタリア文學の驍將シャルル・ルイ・フィリップの代表作である。貧困の内に育ち行く子と情愛溢るる母の心理を、新鮮な感覺を以て描いた美しく涙ぐましき物語りである。

堀口大學譯（新刊）

聖母の曲藝師

四六判上製・定價二圓・送料十錢

アナトオル・フランスを始め、レニエ、フアレル、メエテルリンク、グルモン、フイリップ、パルビユス、シユオブ、モオラン等の短篇小說十六を收む。或は彫心鏤骨の傑作、或は天衣無縫の神品、いづれも珠玉の名篇のみ。

ハアゼンクレエフエル作　麻生義譯（近刊）

世の救濟者

四六判上製・定價二圓三十錢・送料十錢

ワルタア・ハアゼンクレフエルを讀まずして表現主義を云々すべからず。本書は彼の近作四篇を收む。構想の大膽、手法の奔放、明日の戲曲の道標。（内容）高利貸。黑死病。アンチゴネ。世の救濟者。

終